

とが む れ い せき
樹 牟 礼 遺 跡

市営住宅城西団地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2010

大分県
佐伯市教育委員会

序 文

本書は、佐伯市大字上岡に所在する市営住宅城西団地建設事業に伴う梅牟礼遺跡の発掘調査報告書です。

大分県南部に位置する佐伯市は、平成17年3月に1市、5町、3村で合併し、九州一面積の広い市となりました。地勢的にも、豊後水道に面した海岸部から九州山地に連なる山間部まで多様な環境を有します。市の中心部を流れる一級河川番匠川は、清流として知られるとともに、その支流を含む流域には、縄文時代早期から集落が営まれ、地域の歴史が刻まれています。

梅牟礼遺跡は、中世佐伯氏の拠点であった梅牟礼城跡を中心とした遺跡群です。調査を実施した城西団地は、主郭の東麓に位置し、以前より佐伯氏の居館であった可能性が論じられてきた場所です。今回初めて発掘調査を行うことができ、遺構の有無を含めて確認することができました。

本書が、今後の埋蔵文化財の保護ならびに当地域の歴史研究の一助になれば幸いに存じます。

最後に、本発掘調査を実施するにあたり、ご協力を賜りました関係各位に対し深く感謝を申し上げます。

平成22年3月

佐伯市教育委員会

教育長 分 藤 高 嗣

例 言

1. 本書は、平成15年度に発掘調査を実施した市営住宅城西団地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査区は佐伯市大字上岡2260番地に所在する。
3. 発掘調査は佐伯市教育委員会が主体になり、平成15年11月25日～平成16年1月9日まで実施した。
4. 調査は、佐伯市教育委員会社会教育課文化係(現文化振興課文化財係)の吉武敦子が担当した。
5. 出土遺物の整理作業・実測は畔津宏幸(平成18年度 文化振興課嘱託職員)が、実測・図版作成・浄書・写真撮影は吉武が行った。また、図版作成に五十川清也(文化振興課嘱託職員)の協力を得た。
6. 本書の執筆・編集は吉武が行った。

目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 調査の体制	1
III. 御牟礼遺跡の位置と歴史的環境	2
IV. 調査の成果	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	5
V. まとめ	9

挿図目次

第1図 御牟礼遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図 調査区遺構配置図	4
第3図 1区南壁土層図	5
第4図 石組遺構実測図	6
第5図 11・12層出土遺物実測図	7

表 目 次

第1表 11・12層出土遺物観察表	8
-------------------	---

写真図版

写真図版1 調査区1・2区全景 石列遺構全景	
写真図版2 石列遺構検出状況(東端・西端) 1区南壁土層 12層遺物出土状況(1区)	
写真図版3 11・12層出土遺物	
写真図版4 12層出土遺物	

I. 調査に至る経緯

佐伯市では、老朽化した市営住宅城西団地の建て替え事業を、平成15年度から平成21年度までの7ヵ年で実施することになった。城西団地は梅牟礼城跡（現梅牟礼遺跡）の範囲内に含まれることから、教育委員会では工事着手前の確認調査が必要と判断し、事業担当課である建築住宅課と協議を行った。工事は団地をA～Dの4区に分け、A～C区の順にそれぞれ2ヵ年、D区を最後の1ヵ年で行う計画であった。そこで埋蔵文化財の調査についても工事の工程に従い、A～D区の順に既存建物等の解体撤去後行うこととした。

調査地点は梅牟礼城跡東麓の谷部に位置する。団地は、門前川南岸の低地が広がる周辺部より比較的標高が高く、それまで佐伯氏の居館の想定地の一つとされていた。平成15年8月4～6日、第1期工事が行われるA区に10箇所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。A区の面積は6,058.19㎡である。掘削の結果A区南端で遺物包含層を検出したため、この地点の本調査を実施することになった。その他の地点については、団地の造成土の下層は水分を含む軟弱な粘土層が深く堆積し、遺物も出土しなかった。地元住民によると、かつて深田であった谷筋を埋め立てて団地を建設したということであり、結果としてそれが裏付けられ、居館の可能性は否定されることとなった。

本調査区はA区の南端に位置し、建物本体にはかからないため、調査は建設工事と併行して平成15年11月25日～平成16年1月9日までの期間実施した。調査面積は100㎡。調査は、遺物包含層の掘り下げを行い、遺構の検出に努めた。包含層からは古代～中世の上器・陶磁器が出土し、北端で十留めと思われる石列と木杭を検出したが、他に遺構の検出はなかった。また、包含層下には遺構は認められなかった。

B～D区についても工事着手前に確認調査または立会調査を行ったが、遺構、遺物とも全く出土しなかった。

II. 調査の体制

調査主体	佐伯市教育委員会		
調査責任者	藤浦 武久	佐伯市教育委員会教育長	
調査事務	大鶴 直己	同	社会教育課 課長
	菅 伊都子	同	社会教育課文化係 係長
調査担当	吉武 敦子	同	社会教育課文化係 主査

調査期間中、坂本嘉弘氏（大分県教育庁文化課主幹 平成15年度）にご指導、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

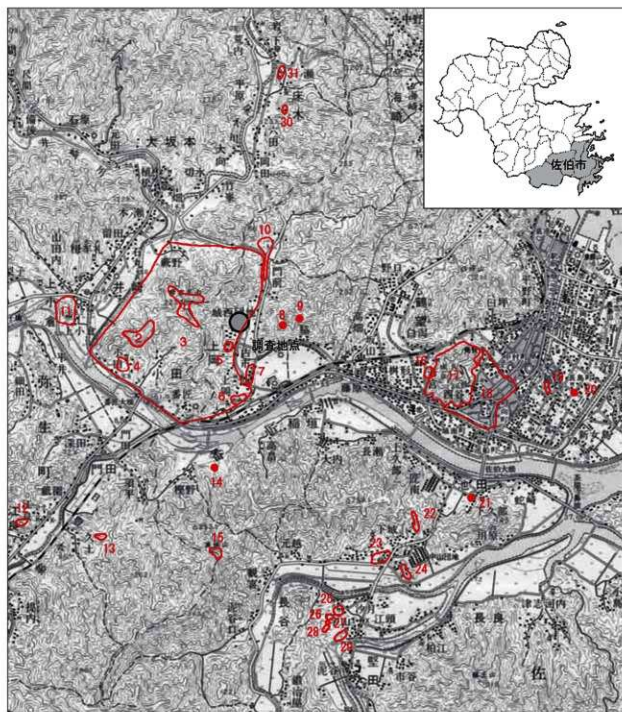
Ⅲ. 梅牟礼遺跡の位置と歴史的環境

平成17年3月、佐伯市と南海部郡5町3村が合併し、新佐伯市が誕生した。東の海岸部は豊後水道に面し、複雑なリアス式を呈する天然の良港である。海岸線の延長は270km。西から南にかけては九州山地に連なる険しい山間部がつづき、番匠川、木立川、堅田川下流に狭小な沖積平野が形成される。現在の佐伯市街地は、近世初頭に番匠川河口の沖積地を埋め立て建設された城下町を中心に発展したものである。

梅牟礼遺跡は佐伯市北部の山弥生町と旧佐伯市の境に位置し、標高223.65mの梅牟礼山とその山麓部を含む。梅牟礼城跡は山頂に築かれた中世山城で、東西南の三方を門前川、井崎川、番匠川に囲まれる。主郭は最も標高の高い平坦地にあり、南側に下りながら3つの曲輪が続く。主郭及び曲輪へと通じる尾根には防御のための堀切、塹堀が築かれている。中世の佐伯は大友氏配下の同族佐伯氏の支配下にあり、梅牟礼城はその拠点であった。築城時期は16世紀前半代と考えられている。また、梅牟礼城跡から南西に伸びる尾根上にはより新しい様相を呈する小田山城跡がある。16世紀末の築城と推定される。

梅牟礼山と東の三上寺の山に挟まれた南北に伸びる谷は、北が狭く南が開けた地形となり、中央を南流する門前川は番匠川に合流する。谷南端の微高地にある古市地区は城下の推定地であり、隣接する八戸地区には十三重石塔がある。石塔の直下及び周辺地下からは、中国製青磁四耳壺、古瀬戸灰釉瓶子など平安時代末期～鎌倉時代初期の蔵骨器「数点」が出土した。また、谷を挟んで東側の山中には二上寺跡、三上寺跡があり、三上寺跡からは埋納された銅鏡7枚と銅銭797枚が発見されている。一方、城跡西山麓の土小倉崖石塔群では嘉暦元年(1326)～康永4年(1345)の記年銘が確認されている。このように梅牟礼城跡を中心とした山麓周辺には中世の遺跡が点在し、この一帯が佐伯荘の中心城であったことをうかがわせる。

文禄2年(1593)、朝鮮に出兵した大友義統が秀吉の怒りを買って改易されると、佐伯惟定は藤堂高虎を頼り伊予宇和島に渡った。大友家除国後太閤蔵入地となった豊後は、徳川時代に入ると小藩分立の状態となる。佐伯には日田より転封された毛利高政が入り、初代藩主となった。高政は険しい山城である梅牟礼城を放棄、番匠川河口の八幡山(標高約140m)に新城を築き、南東麓の沖積地を埋め立てて城下町を建設した。ここに梅牟礼城はその歴史的役割を終えたのである。



1 梅牟礼城跡	2 小田山城跡	3 梅牟礼遺跡	4 小田山館跡
5 曳地館跡	6 木戸城跡	7 古市遺跡	8 二上寺跡
9 三上寺跡	10 佐伯門前遺跡	11 上小倉横穴群	12 竹田城跡
13 平城跡	14 檜野古墳	15 高城跡	16 白濁遺跡
17 鶴屋城跡	18 佐伯城下町	19 森山遺跡群	20 宝剣山古墳
21 岡ノ谷古墳	22 中山砦跡	23 下城遺跡	24 八幡山城跡
25 長良貝塚	26 上ノ台館跡	27 上の台遺跡	28 汐月遺跡
29 宇山城跡	30 瀬戸遺跡	31 大友山砦跡	

第1図 梅牟礼遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院発行「佐伯」5万分の1地形図使用）

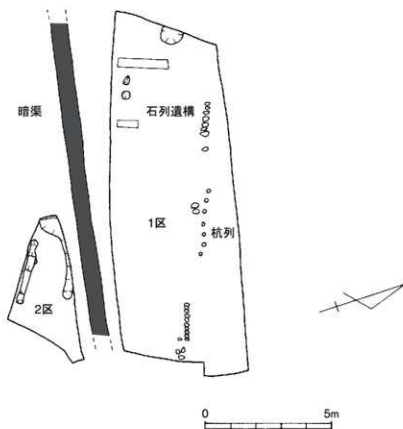
IV. 調査の成果

1. 調査の概要

本調査区は団地内の公園予定地である。既存の暗渠を避けるため、面積約59.8㎡の略長方形の調査区と面積約6.5㎡の狭小な三角形の調査区に分けて調査を実施した。便宜的に前者を1区、後者を2区と呼ぶ(第2図)。最初に重機で1区、2区の表土と団地造成土を除去し、遺物包含層である暗茶褐色土層(11層)まで掘り下げた。その後人力による作業に切り替え、掘り下げながら遺物と遺構の検出に努めた。

1区では、薄く堆積した11層を掘り下げると黒褐色土層(12層・遺物包含層)に達し、北壁寄りの12層中から1列に並ぶ石列遺構と杭列を検出した。東壁際で出土した石組状のものについては精査の結果遺構とは認められないと判断した。最後に包含層確認のため、トレンチ2本を設定し掘り下げたが、遺構は検出できなかった。

2区においても包含層を掘削し遺構の精査に努めたが、確認には至らなかった。



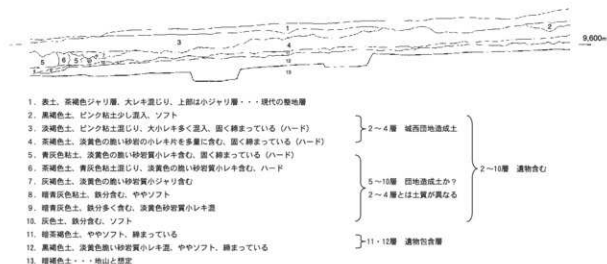
第2図 調査区遺構配置図 (1/150)

2. 遺構と遺物

1) 石列遺構 (第4図)

石列は1区北壁寄りの位置から東西方向に出土し、比較的大きく均一な石が並ぶ西側残存部分と小礫も混在する東側残存部分、かろうじて2石が残る中央部とで構成される。中央部では石列の北側に平行して杭列を検出した。遺構は欠損箇所が多いが、残存する石はほぼ直線上に並び、本来は連続した石列であったことがわかる。石列は1区を南北に区切るように出土し、これを境に包含層は北側に続かないことを確認した。

以上の点から、本遺構は、遺物包含層である暗茶褐色土(11層)及び黒褐色土(12層)の上留めであった可能性が高く、杭に丸釘が打たれていることから構築年代は明治以降と考えられる。



第3図 1区南壁土層図 (1/90)

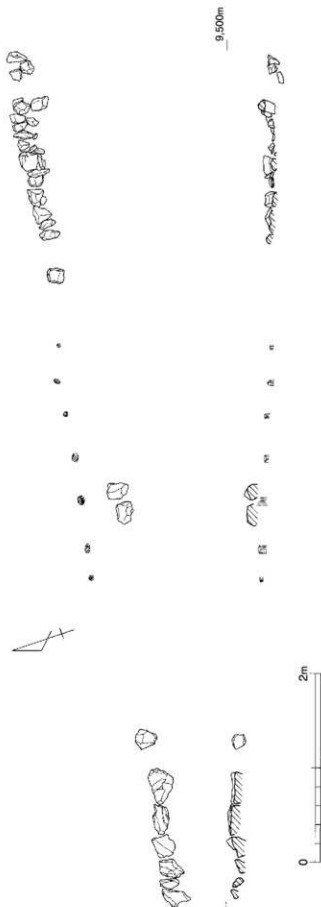
2) 出土遺物 (第5図)

遺物は包含層中(11・12層)、特に12層から多く出土したが、大半は細片であり、図化できたものは少ない。詳細は観察表に譲り、以下簡単に全体的な特徴を述べる。

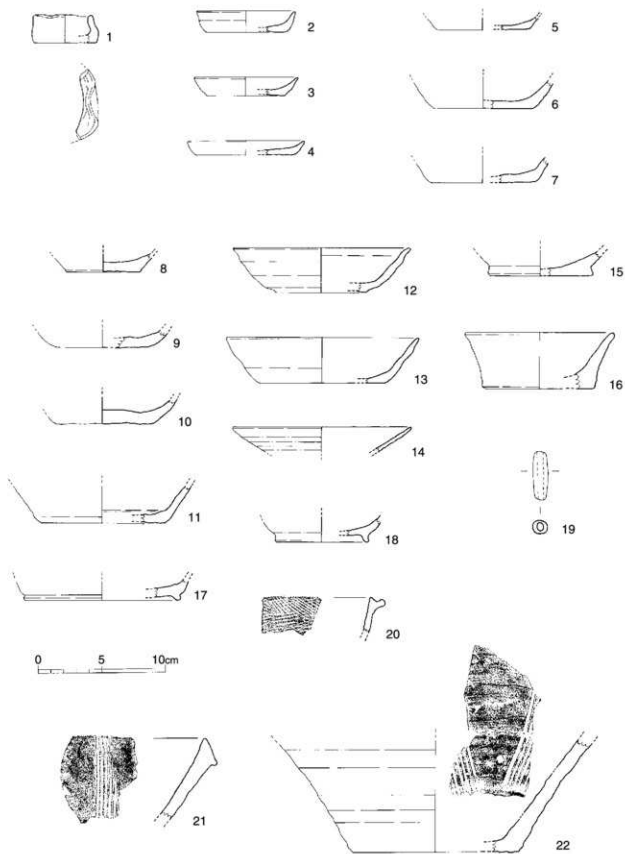
包含層出土遺物は土師質土器、須恵器、瓦質土器、国産陶器、中国製磁器等であり、時期的には古代～中世で占められる。器種としては土師質土器杯あるいは小皿が最も多く、杯は底部回転ヘラ切り(5～7)と回転糸切り(8～11)に分けられる。前者は口縁部が確認できていないが、器形の特徴から8世紀後半～9世紀代に収まると考えられる。また、断面方形の高台を付す杯(17)も8世紀後半代に位置づけられる。

底部糸切りの杯についても全体の形状が分かるものはない。12・13は体部中位に段をもち口縁部が短く外反する器形であり、底部の調整痕は観察できなかつたがおそらく回転糸切りであろう。年代は15世紀前半代。その他の杯も15世紀代を中心に14～16世紀代の範囲に収まるものと考えられる。21・22の備前搦鉢も15世紀代の所産である。

以上より、包含層の遺物は8～9世紀と14～16世紀の2時期に大きく分けられることが判明したが、各時期の遺物に層位の違いは認められなかつた。



第4図 石給遺物採取図 (1/20)



第5图 11·12层出土遗物实测图(1/3)

第1表 11・12層出土遺物観察表

番号	器 種	法 量			調 整	出 土	色 調	出土 部位	備 考
		口径	器高	底径					
1	土動質土器小皿	5.0	2.2	5.0	内面・外面上半部はナデ、外面下半部はケズリ	赤色砂殻を含むが、精選されている。	淡黄白色	11層	
2	土動質土器小皿	7.6	1.7	6.4	内外面回転ココナデ、底部右回転糸切り	精選されている。	淡黄白色	12層	
3	土動質土器小皿	8.1	1.5	6.0	内外面回転ココナデ、底部左回転糸切り	金雲母を含むが、精選されている。	淡灰色	12層	
4	土動質土器小皿	9.0	1.1	7.8	内外面回転ココナデ、底部回転糸切り	赤色砂殻を少量含むが、精選されている。	淡褐色	12層	
5	土動質土器杯	—	—	7.4	磨滅のため調整不明	白色砂殻・角閃石粒を少量含む。	淡黄白色	12層	
6	土動質土器杯	—	—	7.8	内面ナデ、外面磨滅のため不明、底部回転ヘラ切り	斜長石粒・白色砂殻を含む。赤色砂殻・石炭殻・角閃石粒を微量含むが、精選されている。	内面：灰色 外面：淡黄白色	12層	
7	土動質土器杯	—	—	8.4	内外面ナデ、底部回転ヘラ切り・板状圧痕	赤色砂殻を微量含むが、精選されている。	淡黄白色	12層	
8	土動質土器杯	—	—	5.8	内面ナデ、外面磨滅のため不明、底部右回転糸切り	赤色砂殻・斜長石を微量含むが、精選されている。	淡黄白色	12層	
9	土動質土器杯	—	—	6.0	内面回転ナデ、外面回転ケズリ	赤色砂殻・金雲母・角閃石・石英を含む。	褐色	12層	
10	土動質土器杯	—	—	7.6	内面ナデ、外面磨滅のため不明、底部回転糸切り後ナデ磨し	赤色砂殻を少量含むが、精選されている。	褐色	12層	
11	土動質土器杯	—	—	9.6	内外面ナデ、底部切り差し痕ナデ磨し	赤色砂殻を微量含むが、精選されている。	内面：淡黄白色 外面：淡灰色	12層	
12	土動質土器杯	13.8	3.5	7.2	内外面口クロ調整痕	赤色砂殻・金雲母少量含むが、精選されている。	淡黄白色	12層	
13	土動質土器杯	14.6	3.6	9.4	内面磨滅のため調整不明、外面口クロ調整痕、底部は糸切りか?	赤色砂殻を多く、斜長石粒を微量含む。	淡黄白色	12層	
14	土動質土器杯	14.0	—	—	内面磨滅のため調整不明、外面上部回転ナデ、下部回転ケズリ	精選されている。	灰白色	12層	
15	土動質土器杯	—	—	8.0	内面回転ナデ、外面回転ケズリ	白色砂殻を多く、赤色砂殻と黒色粒を微量含む。	淡褐色	12層	
16	土動質土器杯	11.6	4.5	8.2	磨滅のため調整不明	赤色砂殻を多量に含む。	淡黄灰色	12層	
17	土動質土器杯	—	—	13.2	内外面ナデ	白色砂殻・灰色砂殻を多量、赤色砂殻・角閃石粒を少量含む。	褐色	12層	
18	土動質土器碗	—	—	7.2	内面調整ナデ、外面右回転ケズリ、裏右回転ナデ	白色砂殻を多く、斜長石粒・角閃石粒・赤色砂殻を微量含む。	褐色	12層	
19	土皿	長さ3.8、最大幅1.15				赤色砂殻・金雲母を含む。	淡黄色	12層	
20	瓦葺土器筒	—	—	—	内面上部斜め方向のケギ目、下部口コ方向の寛平目、外面上部ナデ、下部ヘラケズリ	斜長石殻を多量に含む。	黒灰色	12層	
21	陶器楕鉢	—	—	—	焼き始め陶器 内面に筋がき条線			12層	南西産
22	陶器楕鉢	—	—	13.0	焼き始め陶器 内面に筋がき条線			12層	南西産

V. まとめ

本事業では、確認時に古代～中世の遺物を含む黒褐色の包含層を検出し、梅沖礼城跡（現梅沖礼遺跡）範囲内ということもあり本調査を実施した。調査地点は城跡東山麓の平坦地であり、中世遺構の検出を期待したが、包含層の北端部から近代の石列遺構が出土したのみであった。また、石列を境に北側には包含層が認められないことから、石列が土留めである可能性が高いと判断した。

以上の点から、石列は近代以降に造成された畑の土留めであり、遺物包含層は畑土として別の場所からこの地に運ばれたと考えるのが妥当であろう。おそらく上の採取地こそが遺跡であったと思われる。

今調査では残念ながら佐伯氏に関連する遺跡は発見できなかった。しかし、第2期工事以降の立会調査も含め当該地全体の状況が判明したことは、周辺部調査に繋がる一定の成果であった。今後の調査に期待したい。



調査区（1区）全景



調査区（2区）全景



石列遺構全景（東から撮影）



石列遺構東端検出状況（南から撮影）



石列遺構西端検出状況（南から撮影）



1区南壁土層



12層土師質土器坏出土状況(1区)



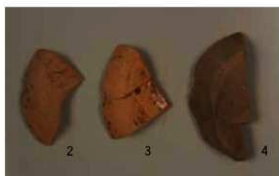
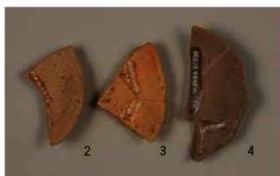
12層土師質土器坏出土状況(1区)



12層土錘出土状況(1区)



11層出土遺物



12層出土遺物



12層出土遺物

報告書抄録

書名	梅牟礼遺跡
副書名	市営住宅城西岡地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	古武牧子
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
発行年月日	2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
梅牟礼遺跡	大分県佐伯市 大字上岡 2260番地	205	002			08.11.25 ～ 04.01.09	100m ²	市営住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅牟礼遺跡	包蔵地	古代 中世	石列	土師質土器・ 陶磁器・瓦質土器	石列遺構の年代は 近代以降

市営住宅城西岡地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

梅牟礼遺跡

2010年3月31日

発行 佐伯市教育委員会
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
TEL 0972-22-4234

印刷 元屋印刷株式会社
〒876-0853 大分県佐伯市鶴谷町3丁目1番9号
TEL 0972-24-0900